徳島市埋蔵文化財調査報告書第9集

阿波国分寺跡第3次調査概報

—1980年度—

1981

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財調査報告書第9集

阿波国分寺跡第3次調査概報

—1980年度—

1981

徳島市教育委員会

序

阿波国分寺跡の周辺は原始・古代の中心地であったことは周知の事実であり，多数の竪穴住居跡，土壙状遺構，溝状遺構などが検出された弥生時代を中心とした集落跡である矢野遺跡，気延山東山麓に展開する4世紀末から7世紀前半に至る80基以上の古墳により構成されている気延山古墳群，歴史時代の阿波国庁跡などが所在している。

阿波国分寺跡の第3次調査が実施され，昭和53年度より3ヶ年計画による阿波国分寺跡の寺域及び中心伽藍の調査の最終年度として，奈良時代以降の政治・経済の中心でもあった官寺の性格究明に貴重な資料を提供してくれました。

中央集権国家の象徴としての国分僧寺の全容の一部が解明されつつあります。これらの貴重な文化遺産を後世に残すという責任が私達ひとりひとりに課せられた課題かと思われます。

最後となりましたが，調査にあたって，ご指導・ご助言をいただいた奈良国立文化財研究所の山崎信二先生をはじめとする研究者の方々とともに，地元の方々のご協力，特に地権者の方々の真摯なご助力に対して深く感謝いたします。

昭和56年 3 月31日

徳島市教育委員会

教育長　七　條　　力

例　　言

1. 本書は，昭和55年12月８日から昭和56年３月23日まで発掘調査を実施した「阿波国分寺跡」の第３次調査の概要報告である。

2. 調査は，国・県の補助を受けて，徳島市教育委員会が主体となり，「阿波国分寺跡発掘調査団」を編成して実施し，事務処理については徳島市教育委員会社会教育課が担当した。

3. 検出遺構の実測図については，各調査員・調査補助員が分担した。遺構・遺物の写真，遺物実測及び製図については一山　典が担当し，一部調査員の河野幸夫・横田里司・滝山雄一の協力を得た。

   また，遺物整理については調査員・調査補助員の協力を得て実施した。

4. 挿図の第１図については建設省国土地理院発行の２万５千分の１の地形図（徳島・石井図幅）を転載したものである。

5. 本書の執筆は，奈良国立文化財研究所の山崎信二氏のご指導により，第１章を河野幸夫・一山，第２～４章及び編集を一山が担当し，調査員の河野・横田・滝山の協力を得た。

目　　次

第１章　位置と歴史的環境 …… 1

第２章　調　査　の　経　過 …… 8

第３章　調査成果の概要 …… 12

D　地　区 …… 12

E　地　区 …… 14

F　地　区 …… 14

G　地　区 …… 14

H　地　区 …… 14

I　地　区 …… 16

第４章　小　　結 …… 17

挿　図　目　次

第１図　阿波国分寺跡と周辺の遺跡 …… 2
第２図　第１・２次調査地点周辺地形図 …… 10
第３図　第３次調査地点周辺地形図 …… 11
第４図　Ｄ地区遺構配置図 …… 13
第５図　Ｅ地区遺構配置図 …… 15
第６図　Ｆ地区遺構配置図 …… 15
第７図　Ｇ地区遺構配置図 …… 15
第８図　Ｈ・Ｉ地区遺構配置図 …… 16
第９図　阿波国分寺跡の地割と周辺の条里 …… 17
第10図　阿波国分寺跡伽藍配置推定図 …… 18
第11図　出土軒丸瓦拓影図(1) …… 21
第12図　出土軒丸瓦拓影図(2) …… 22
第13図　出土軒丸瓦拓影図(3) …… 23
第14図　出土軒平瓦拓影図 …… 24

図　版　目　次

図版１　Ｄ地区調査地点遠景　北西より
　　Ｄ地区溝状遺構　南より
図版２　Ｄ地区溝状遺構　南より
　　Ｄ地区建物跡　西より
図版３　Ｄ地区溝状遺構　南より
　　Ｄ地区溝状遺構（古墳時代）　南より
図版４　Ｄ地区溝状遺構断面　北より
　　Ｄ地区溝状遺構断面　北より

図版 5　D地区溝状遺構須恵器出土状態
D地区土器出土状態
図版 6　F地区瓦集積遺構　東より
F地区溝状遺構　東より
図版 7　F地区溝状遺構断面　東より
F地区溝状遺構断面　南東より
図版 8　F地区ピット状遺構　北より
F地区ピット状遺構　北より
図版 9　F地区文字瓦出土状態
F地区土器出土状態
図版10　G地区調査地点遠景　北東より
G地区遠景　西より
図版11　G地区溝状遺構断面　南より
G地区溝状遺構断面　北より
図版12　H地区溝状遺構　東より
H地区溝状遺構断面　南より
図版13　H地区瓦出土状態　北より
H地区軒丸瓦出土状態　北より
図版14　I地区調査地点遠景　南東より
I地区溝状遺構断面　南より
図版15　I地区溝状遺構断面　南より
I地区瓦出土状態　北より
図版16　出土軒丸瓦（縮尺不同）
図版17　出土軒平瓦（縮尺不同）
図版18　出土瓦類　（縮尺不同）

第1章　位置と歴史的環境

吉野川の支流である鮎喰川によって形成された平野の末端付近に位置する徳島市国府町（左岸），名東町（右岸）一帯は，弥生時代～古墳時代の遺跡から中世の城跡に至るまでの多数の遺跡が存在し阿波の原始・古代の中心地であった。

代表的なものを列挙すれば，矢野遺跡（国府変電所遺跡），源田遺跡，奥谷1・2号墳，宮谷古墳，矢野古墳，阿波国分寺跡，阿波国分尼寺跡，阿波国庁跡等をはじめとして，集落跡，古墳群，寺院跡など重要な遺跡が存在し，一部に条里制の残存が認められる。これらの遺跡の一つとして，阿波国分寺跡が，気延山と辰ケ山との間の谷が東方に広がっていく入口付近の海抜12m前後に位置している。

阿波国分寺跡の歴史的背景を考える上からも，国府町・名東町の平野及び周辺丘陵に存在する奈良時代以前からの遺跡の概要について概略的にみておきたい。

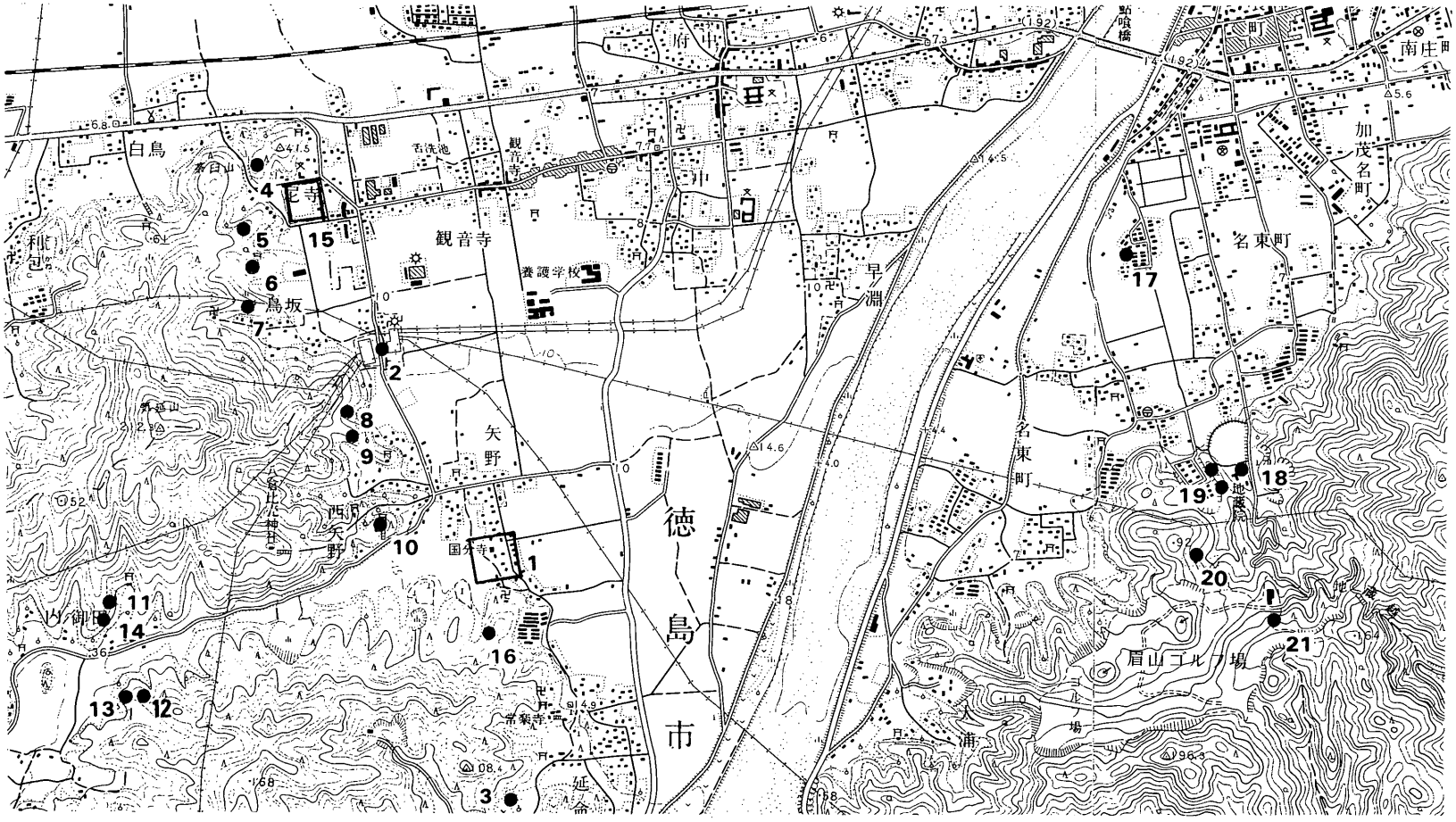
1　古墳時代以前

現在まで，該地域においての縄文時代の明瞭な遺跡は発見されておらず，鮎喰川の右岸の南佐古浄水場遺跡より縄文後期の土器片が検出されている程度で，今後の研究の余地が残っている。

弥生時代に入ると，この沖積平野にも遺跡が展開し，国府町の矢野遺跡（中・後期中心），名東町の名東遺跡（前期～後期）の二大集落跡が展開する。

矢野遺跡は国府変電所を中心に，気延山東側すそ野一帯に広がり，昭和51年6月より数次にわたる発掘調査により，竪穴住居跡，土壙状遺構，溝状遺構，柱穴群等が検出されている。いずれも，四国電力国府変電所の工事に伴う緊急調査であった。第3次調査においては，竪穴住居跡10，土壙状遺構16，溝状遺構2，柱穴群等が検出され，主として弥生時代後期の土器，若干の須恵器・土師器（溝状遺構），石鏃，打製・磨製石斧，鉄製品，有孔円板型土製品などが出土した。(1) 第5次調査では竪穴住居跡6，土壙状遺構3，溝状遺構1，壷棺（？）などが検出され，弥生時代中～後期の弥生式土器片，古墳前期の土師器とともに，若干の須恵器片及び打製・磨製石斧，打製石庖丁，鉄製品などが出土している。(2) 第7次調査では竪穴住居跡2，土壙状遺構2，壷棺2などが検出され，弥生時代中期～後期の土器片，若干の須恵器・土師器・瓦片などが出土している。

名東遺跡は，眉山北西麓のすそ野一帯の沖積平野上に東西700m，南北900mの広範囲に展開し，従来の分布調査・試掘調査などにより，弥生時代前期から後期の土器片などが出土している。(3) 昭和52・53年度において，市営住宅の建替工事に伴う緊急調査が遺跡の北端部で実施された。第1次調査では竪穴住居跡4，土壙状遺構5，溝状遺構16などが検出され，弥生時代中・後期の土器片を中心に若干の須恵器・土師器片，土錘などが出土している。第2次調査では竪穴住居跡1，溝状遺構1，中世土壙などが検出され，弥生時代後期の土器片が大部分であった。従来の研究成果より考えてみると本遺跡は古い時期には眉山のすそ野に近い場所で集落を形成し，中期以降に鮎喰川沿いにも進出していったようである。(4)



第1図　阿波国分寺跡と周辺の遺跡　（縮尺 $\frac{1}{25,000}$）

1	阿波国分寺跡	2	矢野遺跡	3	源田遺跡	4	尼寺古墳群	5	ひびき岩古墳群	6	日枝神社古墳群	7	内谷古墳群
8	矢野古墳	9	奥谷1号墳	10	宮谷古墳	11	内ノ御田1号墳	12	内ノ御田 2号墳	13	内ノ御田須恵窯跡	14	内ノ御田瓦窯跡
15	阿波国分尼寺跡	16	瓦谷瓦窯跡	17	名東遺跡	18	穴不動古墳	19	節句山古墳群	20	うばのふところ古墳	21	八人塚古墳

なお，両遺跡の形成過程については，名東遺跡の場合は，南佐古浄水場遺跡（縄文時代後期以降）から庄遺跡，そして名東遺跡という変遷過程がたどられるが，矢野遺跡の場合は，このような変遷過程がたどれないことが指摘されている。(5) いずれにしても，これらの大集落を経済基盤として，次代の古墳築造のためのエネルギーが蓄積されていったのである。

弥生時代中期以降の重要な遺跡として，農耕祭祀との関連が強いといわれる銅鐸出土地があげられ徳島市内でも，国府町の源田遺跡（3個），入田町の安都真遺跡（4個），上八万町の美田遺跡（7個），八多町の蔭地遺跡（1個）とともに，川内町榎瀬と八万町福万谷で各1個の出土が伝えられている。

源田遺跡は阿波国分寺跡の南方約1,700 m に位置し，四国霊場第16番札所常楽寺南西のため池の西岸の丘陵斜面に立地し，昭和23年3月，袈裟襷文銅鐸3個及び細形銅剣1口が発見された。1個（3号銅鐸）は表面採集で正確な地点は不明であるが，1・2号銅鐸は，山の斜面とほぼ直角に鈕を下にした状態で埋まっており，約1 m隔てて左側に1号銅鐸，右側に2号銅鐸があり，その中央に銅剣が位置していたようである。1号銅鐸は良質の六区画袈裟襷文銅鐸で高さ52cmを測り，身の上部のところが欠損して二つに切断されており，2号銅鐸はほぼ完全な六区画袈裟襷文銅鐸であり，高さ41.5cmを測る。

2 古 墳 時 代

鮎喰川下流域における古墳時代の平野部の遺跡は，前述の矢野遺跡，名東遺跡より該時代の遺物が出土している程度であり，この時代の集落跡については，今後の調査の進展に伴っての研究課題であろう。一方，古墳については平野部に続く丘陵一帯に多数築造されているが，沖積平野上に築造された古墳は皆無となっている。鮎喰川下流域に存在するこれらの古墳で，発掘調査等がなされ，その内容，時期等が判明しているものは少なく，名東町の節句山1・2号墳（発掘調査），八人塚古墳（墳丘実測），穴不動古墳（墳丘・横穴式石室実測），国府町の奥谷1号墳（墳丘実測），矢野古墳（墳丘・横穴式石室実測）などがあげられる程度で，大部分の古墳は墳丘の形状，表面採集遺物や伝承出土遺物等に依拠しているが，これらの古墳の概要を古墳時代前半期と後半期に分けて眺めてみたい。

前半期古墳

該地方で最古の古墳と考えられるのは，節句山1・2号墳であり，1号墳は石蓋盤棺で鉄製品（鉋？）のみの出土の点などからして，弥生時代の墳墓の可能性が指摘されている。2号墳は箱式石棺に竪穴式石室をしつらえた埋葬施設を有し，棺及び石室内部から舶載の四獣鏡や勾玉，鉄剣，鉄刀子，鉄斧，鉄鎌などが検出されており，3世紀末ないしは4世紀前半に位置づけられるとされている。(7) いずれにしても，節句山1・2号墳が古墳発生を考える上での重要な鍵を握っているように思われる。

次に古く位置づけられるのは，八人塚古墳であり，徳島県下では数少ない積石塚の前方後円墳（全長約60m）(8) で，三好郡三加茂町丹田古墳（積石塚で前方後方墳といわれる。全長約37m）(9) と類似点が多いことから，4世紀前半に位置づけられている。なお，八人塚古墳の内部主体は竪穴式石室と考えられている。

奥谷1号墳(全長50m)は4世紀後半から5世紀にかけて増加する前方後方墳の形態を示し，埋葬施設は不明であるが，墳丘の形態や立地の点などから，八人塚古墳に後続するものと考えられている。また，宮谷古墳（前方後円墳，全長約40m）も同様な指摘がなされている。(10)

徳島市内の他地域における前半期の古墳としては，勢見町の勢見山古墳（前方後円墳？　竪穴式石室）(11)，上八万町の巽山古墳（円墳，竪穴式石室）(12)が4世紀後半から5世紀にかけての年代が比定されている。5世紀に入ると，県下最大の前方後円墳（全長約90m）である渋野町の渋野丸山古墳が出現してくる（5世紀中葉）(13)。該期になると，渋野丸山古墳のごとく畿内色の強い古墳とともに，八万町の恵解山古墳群などには，組合式箱形石棺に代表される地域性の強い古墳が形成されたようである。(14)

後半期古墳

鮎喰川流域における丘陵には多数の後半期古墳が存在するが，発掘調査などがなされ，その内容・様相・性格等が判明しているのは1・2例である。従って現状における後半期古墳は，横穴式石室を内部主体とすることが確認できる古墳である。国府町・名東町を通じて，現状では横穴式石室を有する前方後円墳は確認されていない。また，小口積横穴式石室，短小で付随的な羨道部を有する横穴式石室等の古い様相を示す古墳も確認されていない。

鮎喰川下流域の周辺丘陵で確認されている後半期古墳は，気延山東山麓と眉山北西麓の古墳で，それぞれを気延山古墳群，名東古墳群と呼称している。

気延山古墳群は，ひびき岩古墳群，日枝神社古墳群，内谷古墳群，矢野城跡古墳群，八倉比売神社古墳群等に大別される。現在までに確認されているこれらの古墳数は約70基であるが，過去に破壊消滅したものや未確認地域をいれると，80～90基はあったものと推定される。代表的なものとしては，県指定史跡である矢野古墳（内部主体は横穴式石室）があげられる。本古墳は径15m程度の円墳で南東に開口している。玄室長3.8m，玄室幅2.4m，玄室高2.5m，羨道長4.2mを測り，奥壁に巨大な一枚石を使用しており，両袖式の横穴式石室である。(15)

名東古墳群も前述の節句山1・2号墳，八人塚古墳以外は大部分が横穴式石室を内部主体とする後期古墳である。代表的なものとしては，名東町1丁目の地蔵院境内に所在する穴不動古墳があげられる。本古墳は径16mの円墳で南東に開口する両袖式の横穴式石室を内部主体とし，玄室長4.3m，玄室幅2.2m，玄室高2.0m，羨道長5.0m，羨道幅2.0m，羨道高1.8mで 矢野古墳と同様に奥壁を一枚石で構築している。(16)

矢野古墳・穴不動古墳ともに6世紀末から7世紀前半の年代が比定されており，終末期古墳の代表的なものとして重要である。

3　歴　史　時　代

奈良時代は文化的，社会的，経済的な面ばかりでなく，歴史的にも古代日本の画期的な大変動期であったといわれる。該時代においては中央集権の律令制国家の強力な集約化の中で，消費生活の雄大さが進展し，平城京をはじめとする諸京の造営，官立諸寺院を中心に諸大寺の造営に顕著に認められ

た。このような情勢下で，内政不安による鎮護国家体制の一環として，国家権力と経済力の象徴ともいうべき国分僧寺・国分尼寺の建立をみるのである。

歴史時代に入ると，徳島県下においては，鮎喰川下流域の左岸一帯を中心に，阿波国分寺跡，阿波国分尼寺跡，阿波国庁跡などが展開する。

阿波国分寺跡は徳島市国府町矢野に所在し，国道11号線の名西郡石井町鳥坂より県道神山線に沿って南へ 1,500 m の地点に位置する四国霊場第15番札所国分寺を中心に展開する。前述のごとく，鮎喰川下流域の沖積平野上に形成され，南方は辰ケ山山塊より派生する丘陵がせまっている。現国分寺境内に「環溝式」といわれる塔心礎が存在するのと，境内の庭園内に若干の礎石が認められる程度で，礎石等は江戸時代以降に徹底的に破壊されたものか，表面観察上からは顕著な遺構の存在は認められない。東門，西門，北門，坊屋敷，塔ノ本などという寺院と関連深い地名が残っており，注意をひく。なお，昭和28年 7 月に現国分寺を中心に県指定史跡となっている。

従来，阿波国分寺跡については多くの研究がなされているが，伽藍配置，寺域の推定，出土瓦の紹介にとどまり，本格的な調査の端緒がつけられたのは，昭和51年 5 月の市道拡幅工事に伴う緊急調査によってであり，この調査においては非常に狭い範囲ではあるが，「南大門跡」らしき遺構の検出が報告されている。(17) この調査を契機として昭和53年度より 3 ケ年計画で発掘調査が実施された。(18)

阿波国分尼寺跡は阿波国分寺跡の北北西約 1,500 m に位置し，名西郡石井町石井字尼寺，法華寺薮と称する水田中の墓地を中心に展開している。昭和45・46年の 2 度の発掘調査により，金堂・北門・築地・溝などの遺構を検出した。寺域は 158 m（天平尺 1 町半）四方で，伽藍中軸線は真北から西へ約11度ふれ，条里地割とほぼ一致していることが確認されている。昭和48年 4 月に国指定史跡となっている。(19)

阿波国庁跡は阿波国分寺跡の北北東約 1,200 m で徳島市国府町府中の大御和神社を中心に展開したものと推定されているが，従来の研究はあまり進展していない。庁域，方八町などが考えられているが今後の研究課題であろう。(20)

以上のほかにも，観音寺跡（国府町観音寺），西蓮寺跡（国府町西矢野），常楽寺跡（国府町延命）などの寺院跡とともに，入田瓦窯跡（入田町内ノ御田），瓦谷瓦窯跡（国府町矢野），常楽寺瓦窯跡（国府町延命）などの瓦窯跡の存在も考えられている。(21)

国分僧寺の伽藍配置，出土遺物などにより，地理的環境としての立地条件とともに，国司庁，国分尼寺などとの相関関係によって，該期の地形・交通・地方都市の状態が把握され，歴史的環境の復元をも可能にした。又，文化と技術の伝播状態を把握する上においても，律令制下では，国司庁，総社とともに国分二寺の存在は重要な意味を有していたようである。

（河野　幸夫・一山　　典）

註

(1) 徳島県教育委員会「矢野国府変電所遺跡緊急発掘調査概報　第 3 次調査」『徳島県文化財調査概報　1976年度』　1978. 3

(2) 徳島市教育委員会「矢野遺跡（第 5 次）」『徳島市文化財だより』No. 1　1978. 9

(3) 天羽利夫・岡山真知子「第一編　原始・古代の徳島　二　水稲農耕のはじまり」『徳島市史』第一巻　総説編　1973. 3

岡本健児「入門講座　弥生土器3・4」『考古学ジャーナル』№90・92　1974. 1. 3

天羽利夫・岡山真知子「鮎喰川下流域における弥生文化の展開－序論－」『徳島県博物館紀要』第5集　1974. 3

(4) 徳島市教育委員会『名東遺跡第1次調査概報－1977年度－』『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第3集　1978. 3

一山　典「名東遺跡調査成果の概要」『徳島市史だより』第4号　1978. 3

徳島市教育委員会「名東遺跡（第1次）」『徳島市文化財だより』№1　1978. 9

(5) 天羽利夫・岡山真知子「第一編　原始・古代の徳島　二　水稲農耕のはじまり」『徳島市史』第一巻　総説編　1973. 10

(6) 三木文雄「阿波国源田出土の銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』第56巻第2号　1950. 2

天羽利夫・岡山真知子「第一編　原始・古代の徳島　二　水稲農耕のはじまり」『徳島市史』第一巻　総説編　1973. 10

(7) 末永雅雄・森　浩一「徳島県徳島市眉山周辺の古墳調査報告」『徳島県文化財調査報告書』第九集　1966. 3

天羽利夫・岡山真知子「第一編　原始・古代の徳島　三　古墳の発生と変遷」『徳島市史』第一巻　総説編　1973. 10

(8) 末永雅雄・森　浩一「徳島県徳島市眉山周辺の古墳調査報告」『徳島県文化財調査報告書』第九集　1966. 3

徳島県立城東高等学校郷土研究部古墳研究班「徳島市内の古墳研究」『城東郷土研究』第2号　1973. 3

天羽利夫・岡山真知子「第一編　原始・古代の徳島　三　古墳の発生と変遷」『徳島市史』第一巻　総説編　1973. 10

徳島考古学研究グループ「西名東山分布調査報告」『しぶき』№25　1974. 10

天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』第9集　1978. 3

(9) 森　浩一・伊藤勇輔「徳島県三好郡三加茂町丹田古墳調査報告」『同志社大学文学部考古学調査報告』3　1970. 9

(10) 徳島考古学研究グループ編『気延山周辺遺跡調査報告』　1971. 12

天羽利夫・岡山真知子「第一編　原始・古代の徳島　三　古墳の発生と変遷」『徳島市史』第一巻　総説編　1973. 10

天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』第9集　1978. 3

(11) 鳥居龍蔵「阿波国二古墳ノ記」『東京人類学会報告』第2巻第7号　1887. 7

山田良三「筒形銅器考」『古代学研究』第55号　1969. 8

天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』第9集　1978. 3

(12) 田所市太「阿波国星河内の古墳」『考古学雑誌』第10巻第7号　1920. 7
三木文雄「利包及び内容組合式箱式石棺の研究」『石井』(『徳島県文化財調査報告書』　第5集)　1962. 10
天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』第9集　1978. 3
(13) 徳島市渋野公民館編『古墳の研究』　1966. 10
田中英夫「徳島市渋野古墳群の出土品」『古代学研究』第53号　1968. 12
天羽利夫「阿波忌部の考古学的研究」『徳島県博物館紀要』　第9集　1978. 3
(14) 天羽利夫・岡山真知子「第一編　原始・古代の徳島　三　古墳の発生と変遷」『徳島市史』第一巻　総説編　1973. 10
(15) 徳島考古学研究グループ編『気延山周辺遺跡調査報告』　1971. 12
天羽利夫「終末期の古墳二基一穴不動古墳・矢野の横穴式古墳」『徳島県博物館報』No. 14　1972. 3
天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一様相」『徳島県博物館紀要』第4集　1973. 3
(16) 天羽利夫「終末期の古墳二基一穴不動古墳・矢野の横穴式古墳」『徳島県博物館報』No. 14　1972. 3
天羽利夫「徳島県下における横穴式石室の一様相」『徳島県博物館紀要』第4集　1973. 3
(17) 徳島県教育委員会「阿波国分寺緊急発掘調査概報－徳島市道改築工事に伴う緊急発掘調査」『徳島県文化財調査概報　1976年度』　1978. 3
(18) 徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第1次調査概報－1978年度－」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第4集　1979. 3
徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第2次調査概報－1979年度－」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第7集　1980. 3
(19) 徳島県教育委員会・石井町教育委員会『阿波国分尼寺跡緊急発掘調査概報』　1971. 3
徳島県教育委員会・石井町教育委員会『阿波国分尼寺遺跡(第2次)緊急発掘調査概報』　1972. 3
(20) 秋山　泰「第三編　古代」『徳島県史』第一巻　1964. 3
三好昭一郎「第一編　原始・古代の徳島　四　律令国家の成立と徳島地方」『徳島市史』第一巻　総説編　1973. 10
(21) 立花　博・天羽利夫『徳島市入田町内ノ御田瓦窯跡調査概報』　1970. 3

第2章　調　査　の　経　過

阿波国分寺跡付近一帯は，徳島市国府町矢野字南内所在の四国霊場第15番札所の現国分寺を中心に展開し，東側は水田・畑及び住宅地，西側は水田・荒地，南側は水田・畑・住宅地，北側は水田・畑・住宅地などに細分されている。

従来より多くの研究成果が発表され，阿波国分寺跡の重要性が指摘されてきましたが，昭和51年5月の市道拡幅工事に伴う緊急調査を契機として，本遺跡の重要性が再認識されてきました。

このため，徳島市教育委員会は地権者，地元の協力のもとに，国・県の補助金と指導，援助を得て昭和53年度より3ケ年計画で寺域確認調査及び中心伽藍の調査を実施することになった。

第1次調査（昭和53年度）では，寺域西限に関連する地点に「西地区」，塔跡に関連すると思われる地点に「塔地区」，寺域南限に関連すると思われる地点に「南地区」を設定し，西地区からは溝状遺構，建物跡，ピット状遺構など，塔地区からは礎石の可能性も有する大石，南地区からは溝状遺構，築地状遺構などが検出された。

第2次調査（昭和54年度）では，寺域北限に関連すると思われる地点に「A地区」，中心伽藍に関連すると思われる地点に「B地区」，寺域南限に関連すると思われる地点に「C地区」を設定し，A地区からは溝状遺構，建物跡，ピット状遺構など，B地区からは建物跡，瓦溜りなど，C地区からは徳島県下では2例目の平窯形式の瓦窯跡（もう一つは板野郡土成町秋月の蛭子瓦窯跡－徳島県教育委員会調査，室町時代）などが検出された。

本年度（昭和55年度）の調査では中心伽藍に関連すると思われる地点を「D地区」・「E地区」・「F地区」，寺域東限に関連すると思われる地点を「G地区」，寺域西限に関連すると思われる地点を「H地区」・「I地区」と呼称し，3 m×3 mのグリッドを基本として，トレンチ法をも併用して実施した。発掘調査は昭和55年12月8日～昭和56年3月23日の期間において，「阿波国分寺跡発掘調査団」を編成して実施した。

阿波国分寺跡発掘調査団編成メンバー

顧　　問	沖野舜二	（徳島県文化財保護審議会会長）
	田中良平	（徳島市文化財保護審議会委員長）
	秋山　泰	（徳島県文化財保護審議会委員）
	岩崎正夫	（徳島市文化財保護審議会委員）
	伊丹　功	（徳島市文化財保護審議会委員）
	石川重平	（石井町文化財保護審議会会長）
	川人幸夫	（徳島県教育委員会文化課長）
調査団長	七條　力	（徳島市教育委員会教育長）

調査副団長	山本忠男	（徳島市教育委員会社会教育課長）
調査指導	山崎信二	（奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター集落遺跡研究室員）
	立花博	（徳島県教育委員会文化課文化財保護班長）
調査主任	一山典	（徳島市教育委員会社会教育課主事，日本考古学協会員）
調査員	河野幸夫	（阿波郷土会副会長）
	横田里司	（明治大学ＯＢ）
	滝山雄一	（筑波大学ＯＢ）
	松永正司	（徳島市教育委員会社会教育課社会教育指導員）
調査補助員	佐藤修・佐藤正夫・篠原武雄・吉内邦茂	
	矢本利治・武知敏子・身野ミヤ子・美馬邦子	
	武藤照子・森孝子・矢本アサ子・幸田笑子	

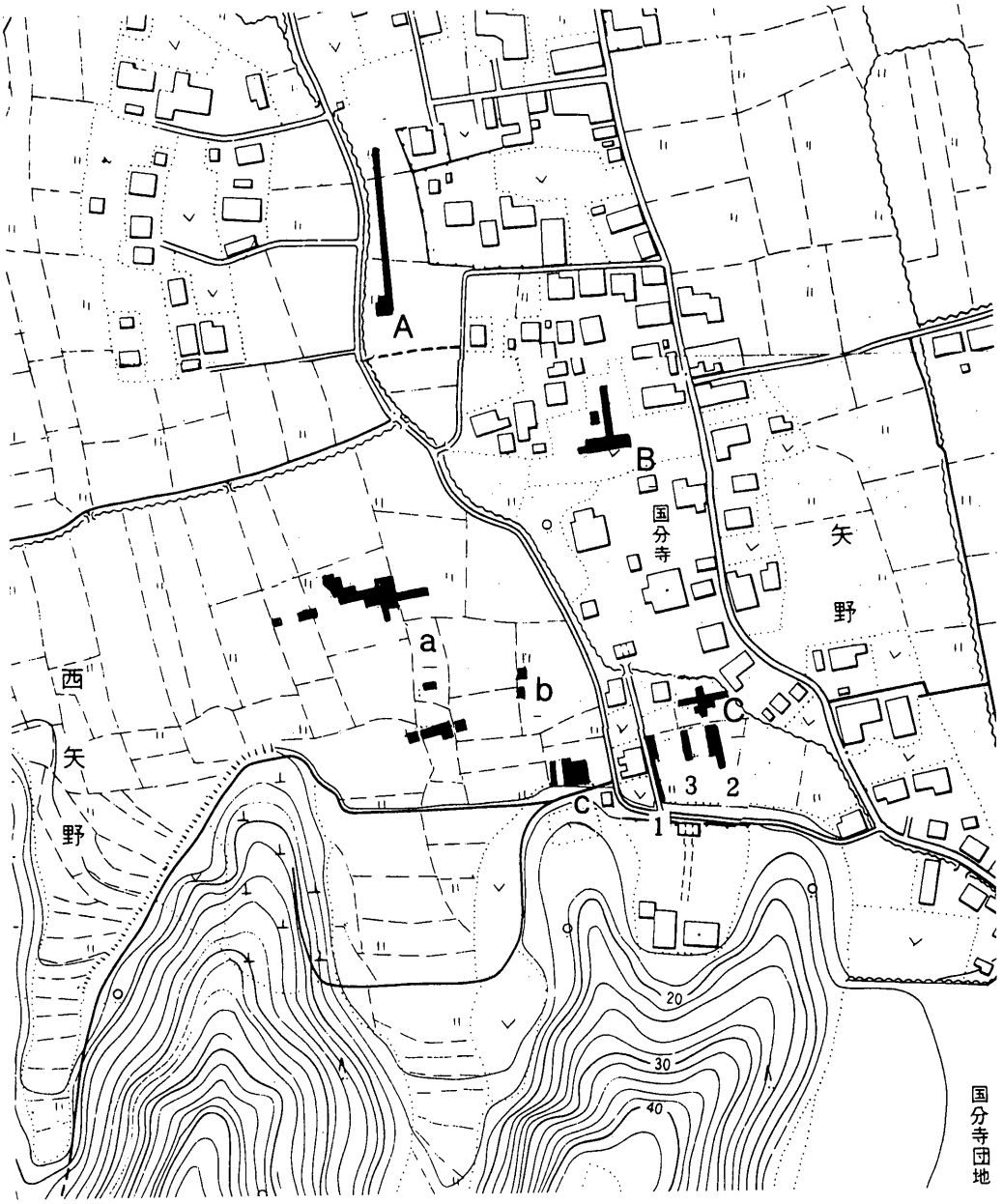
事務局

局長	福島恵	（徳島市教育委員会社会教育課主査兼文化振興係長）
幹事	上杉和夫	（徳島市教育委員会社会教育課指導係長）
	清水博	（徳島県教育委員会文化課庶務係長）
局員	稲垣富美子	（徳島市教育委員会社会教育課主事）
	切幡保子	（徳島市教育委員会社会教育課課員）
指導・助言	天羽利夫・河野雄次・久米惣七・小林市太郎	
	小林勝美・近藤賢・島巡賢二・新孝一	
	菅原康夫・多田寿一・手塚巌・藤井哲四郎	
	松永住美	
地元協力者	下田亘・河野洋・久米富美子・佐藤郷鑑	
	武知敏子・竹林正義・盛香代子・幸田力	
	吉田福一	

（順不同・敬称略）

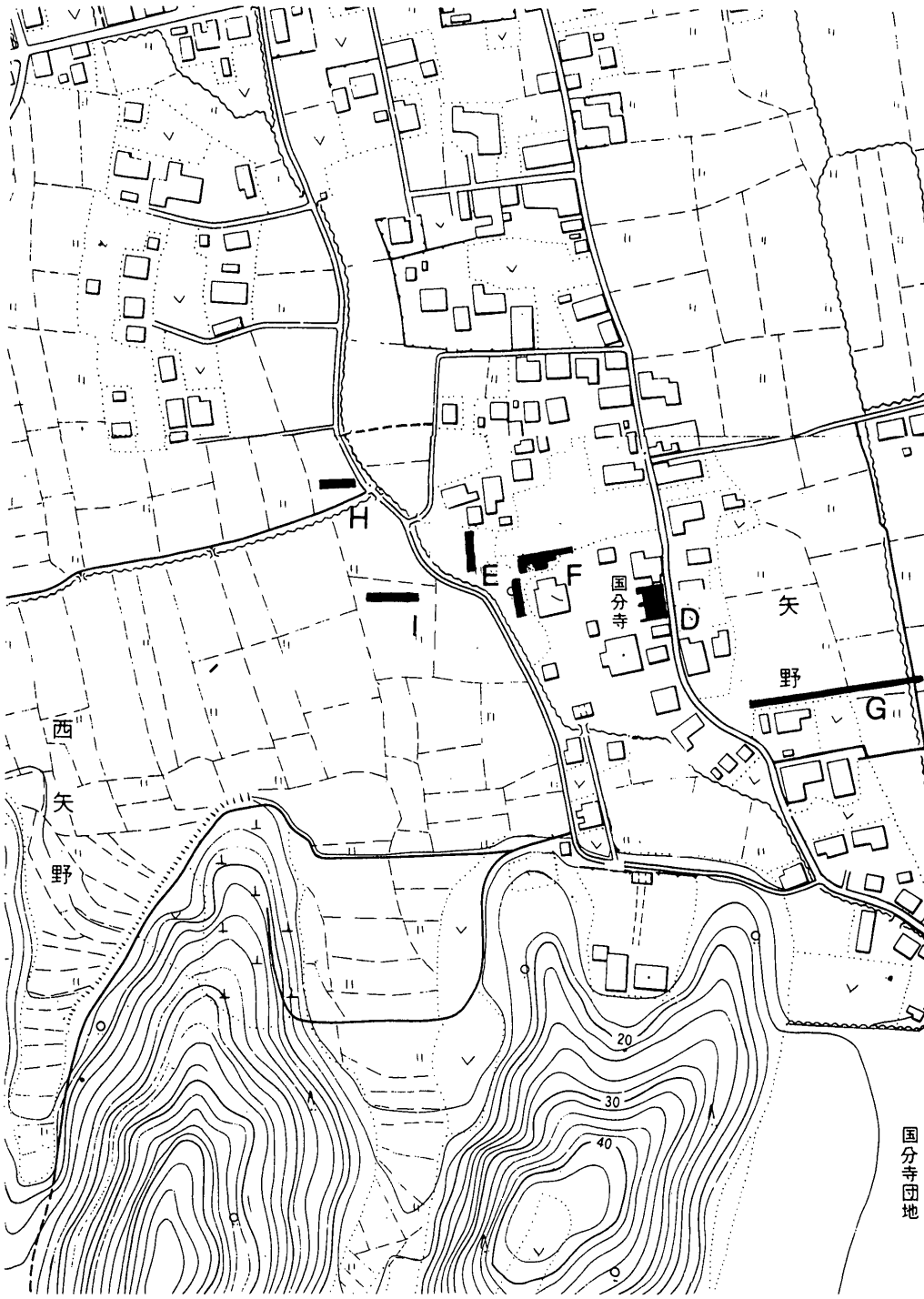
調査期間中は，地元の方々及び地権者の方々の献身的なご援助・ご支援とご理解をいただきましたことを深く感謝いたします。また，ご芳名をいちいちあげられませんでしたが多くの方々のご助力・ご協力に対して厚くお礼を申しあげます。

（一山　典）



第2図　第1・2次調査地点周辺地形図　（縮尺 $\frac{1}{3,000}$）

■ 調査地点　a　西地区　b　塔地区　c　南地区　1～3　第1～3トレンチ
A　A地区　B　B地区　C　C地区



第 3 図　第 3 次調査地点周辺地形図

（縮尺 $\frac{1}{3,000}$）

■ 調査地点　D　D地区　E　E地区　F　F地区
G　G地区　H　H地区　I　I地区

第3章　調査成果の概要

今回の調査は，阿波国分寺跡の史跡指定あるいは将来の史跡公園化などのための必要資料を獲得することにあり，遺構の保存を前提としたものであり，遺構の検出にあたっては，その存在確認を第一として発掘調査を進めることを基本的方針とした。そのために，一部を除いて各調査区とも遺構を完全に検出した状態でとどめ，各遺構自体の構造的様相，技術的内容，時期的変化の状態等の追求は最少限の範囲内で実施した。また，各遺構の推定も全てグリッド，トレンチによる検出部分に基づく復原的な推定であり，全面発掘による全面検出は実施していない。

D　地　区

検出遺構

(1) 建　物　跡

D4・9・14・19グリッドにかけて，南北に走る「雨落ち溝」的な機能を果たしたと思われる瓦列（幅約1m，深さ20～30cmの断面U字形を呈する溝状遺構）が検出され，位置的にみて，東側の回廊跡に付随する遺構と思われるが，東側は道路下に入るため詳細は不明である。

(2) 建　物　跡

D1グリッドの北壁よりに建物跡の南東隅に関連すると思われる瓦の集積が認められた。幅約45cm深さ7cm前後の掘り込みがみられたが，北側及び西側への拡張ができなかったので詳細は不明である。

(3) ピット状遺構

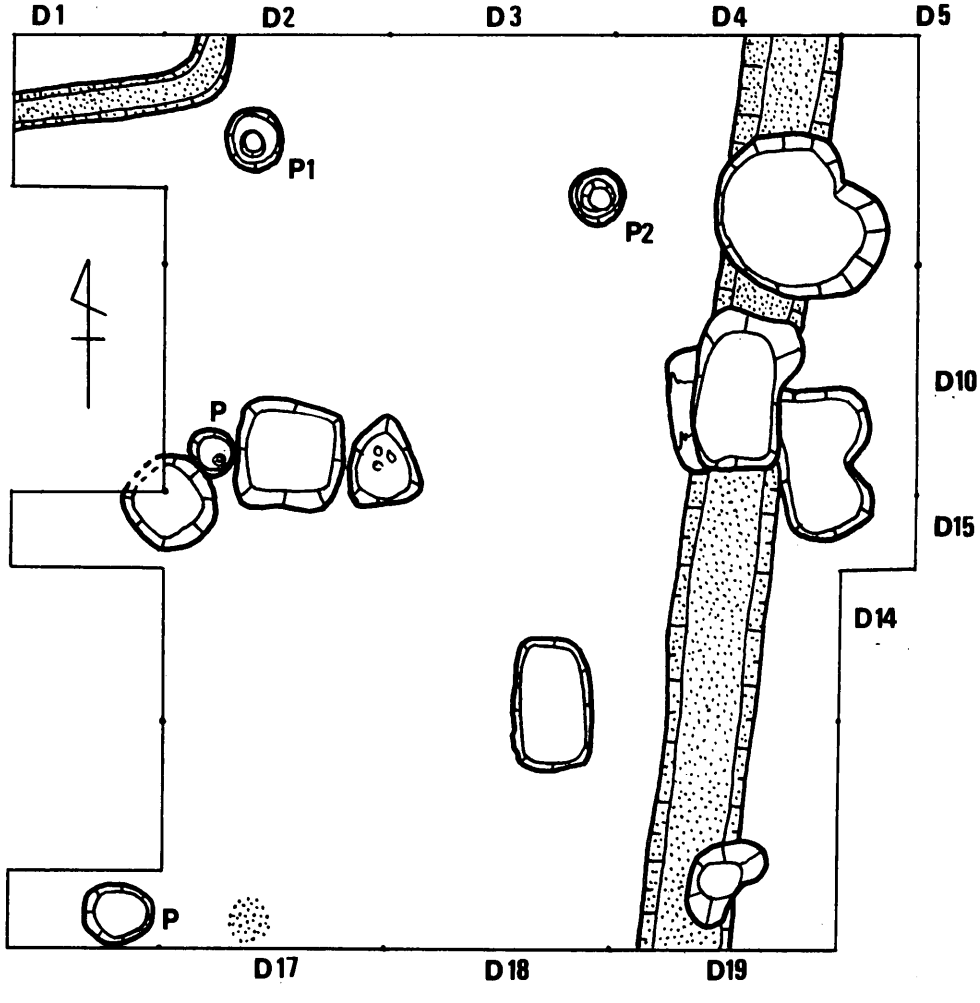
D2・3グリッドに，心々距離約4.7mを測るピットが検出されたが，南側ではD7グリッドの西壁よりに1個，D16グリッドの南東隅付近より1個検出されたのみであり，回廊跡の柱穴の可能性をも有するが，充満している土が相異しているので速断はできない。いずれも直径約70cmの円形ピットであり，深さは15cm前後であった。

出土遺物

前述の建物跡を中心に八葉複弁蓮華文軒丸瓦，均整唐草文・重郭文軒平瓦をはじめ，丸瓦・平瓦片塼とともに土師器・須恵器などが出土している。D1グリッドの建物跡からは土馬も検出されている。

なお，下層より弥生式土器，古墳時代の土師器（甕・坩など）・須恵器（蓋坏・脚台付壷など）が検出されるとともに，土錘なども出土している。古墳時代の遺物は溝状遺構より検出されたものである。

D地区検出の歴史時代の遺構の年代については，年代比定のための土器がほとんど伴出しないので断定はできないが，瓦の様相より奈良時代末期以降の所産と考えられる。



第4図　D地区遺構配置図

E　地　区

検出遺構

E 7グリッドの南側1m，E 6グリッド・E 5グリッド北端部にかけて，幅約4.5 mの砂礫層が認められた。E 3グリッドの西壁よりに瓦と石の集積と北壁よりにも若干の集積が認められた程度で明確な遺構の検出には至っていない。

出土遺物

丸瓦・平瓦片などとともに上面より，陶磁器及び小型の硯などが検出されているだけである。

F　地　区

検出遺構

(1) 溝状遺構

F20・21・30～32・42・43グリッドにかけて，幅60～75cm，深さ20～30cmの溝状遺構が検出された。F20グリッドではゆるく曲がり，F21グリッドより東側では直線状に延びていく。床面はマンガンを含んだ土で堅くしまっている。中には淡灰褐色土が充満していた。上面は瓦の集積した溝状遺構により削平されている。

(2) ピット状遺構

F30・31グリッドにかけて不整形のピット，F 2・3・4グリッドにも円形・不整形のピットが検出されている。

出土遺物

溝状遺構からは土師器・須恵器小片，土錘（大小）などが検出され，上面より八葉複弁蓮華文・十葉単弁蓮華文・重圏文軒丸瓦，重郭文・均整唐草文軒平瓦などとともに丸瓦・平瓦片，塼などが出土している。

G　地　区

検出遺構

(1) 溝状遺構

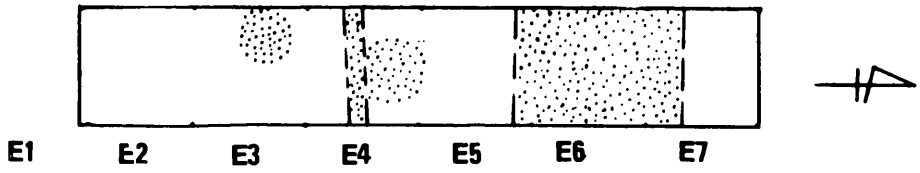
幅3m，深さ約30cm前後の溝状遺構と思われるものが調査区の東端部で検出されたが，上面が削平されており，詳細は不明である。

出土遺物

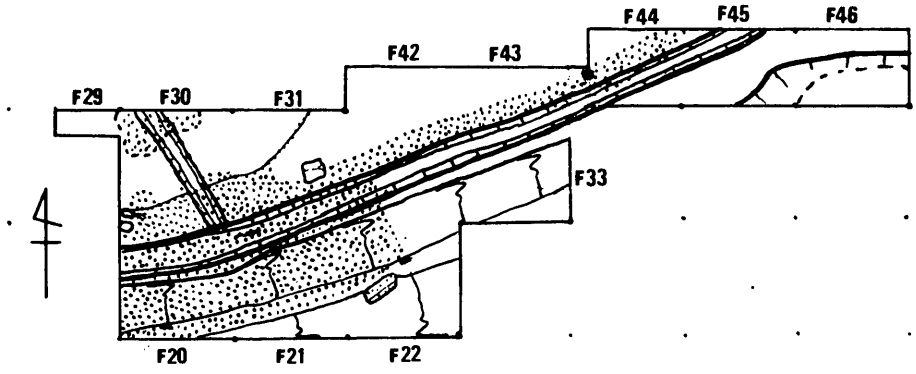
五葉複弁蓮華文・八葉複弁蓮華文軒丸瓦，丸瓦・平瓦片，塼などとともに若干の土器片が検出されている。

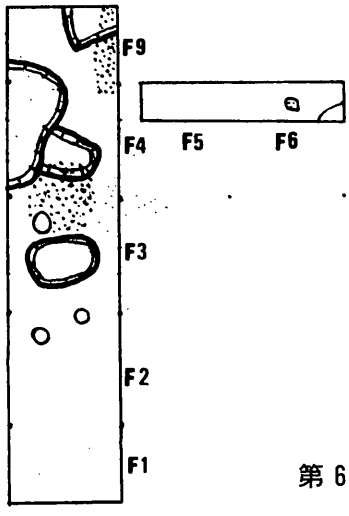
H　地　区

検出遺構

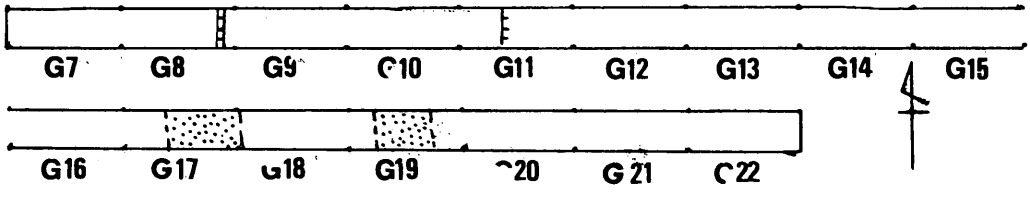


第５図　Ｅ地区遺構配置図　（縮尺 1/200）





第６図　Ｆ地区遺構配置図　（縮尺 1/200）



瓦集積　　第７図　Ｇ地区遺構配置図　（縮尺 1/200）

(1) 溝 状 遺 構

寺域西限に関連すると思われる溝状遺構がH 5・6グリッドにかけて検出された。幅については東側が道路下に入るので東側の立ち上りが検出されていないので不明であるが，検出部分では 3 m前後となっている。深さは70cm前後となっている。

出 土 遺 物

八葉複弁蓮華文軒丸瓦，重郭文軒平瓦，隅切瓦（平瓦）などとともに丸瓦・平瓦片および土師器・須恵器片などが検出されている。

I 地 区

検 出 遺 構

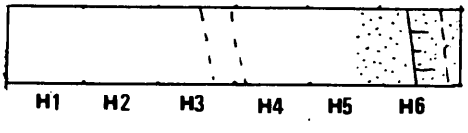
(1) 溝 状 遺 構

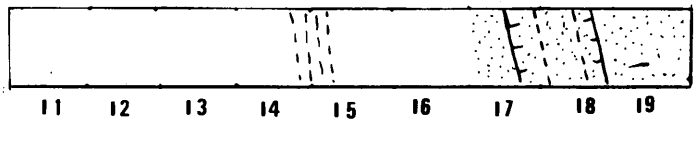
H地区より続く溝状遺構が調査区の東端部に検出され，幅約 3 m，深さ 1.5 m前後を測る。 なお，下層より古墳時代の溝状遺構の一部が検出されている。

出 土 遺 物

八葉複弁蓮華文・八葉単弁蓮華文軒丸瓦，重郭文軒平瓦をはじめ，文字瓦（守を二重にかこむ），丸瓦・平瓦片，塼などとともに，須恵器・土師器片などが出土している。

（一 山 典）





第 8 図 H・I地区遺構配置図 （縮尺 1/300）

第４章　小　　結

最後に，今回の発掘調査における問題点をあげて，小結にかえたい。

① 寺地と地割に関する諸問題

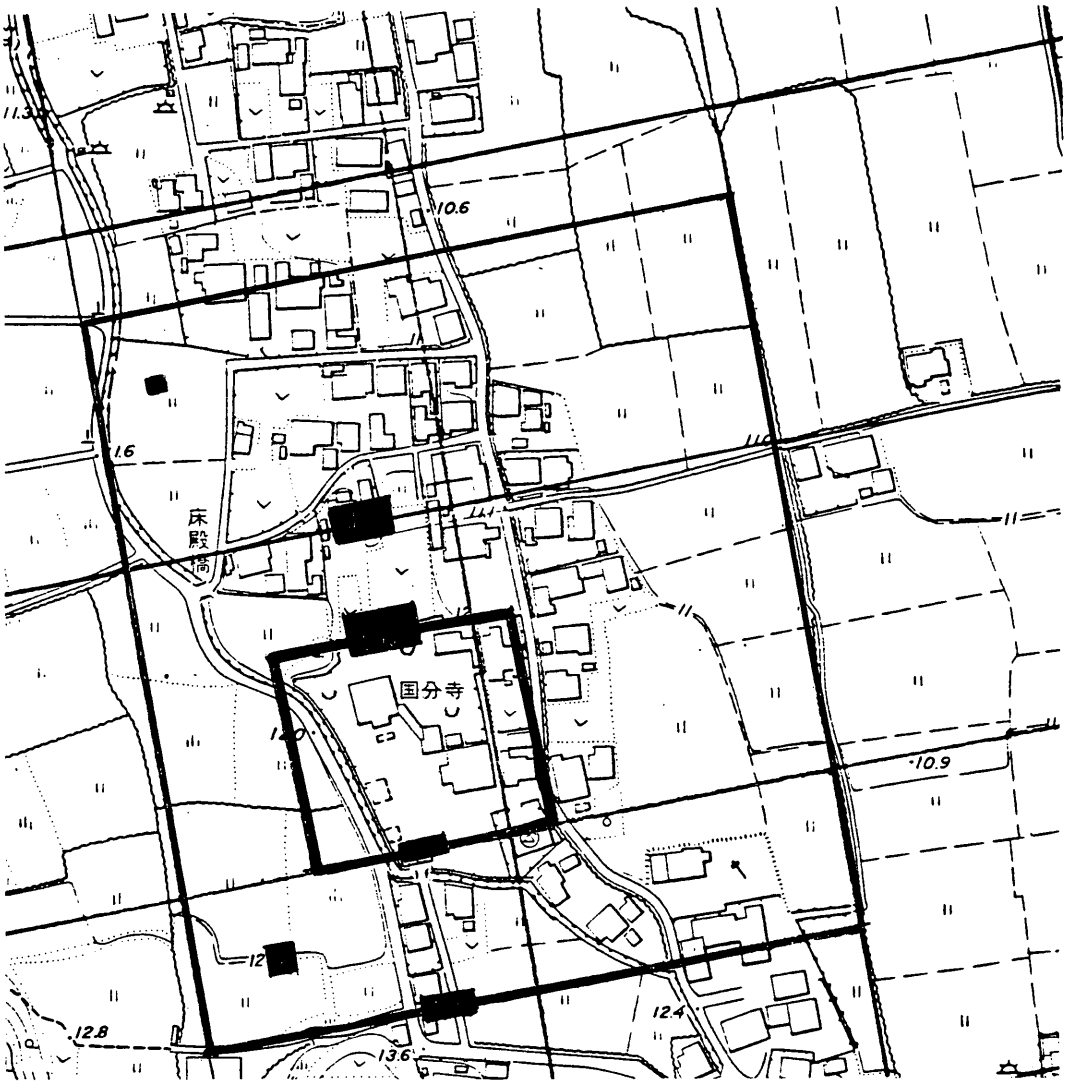
阿波国分尼寺跡の場合は，条里制との密接な関連がうかがえる。阿波国分寺跡の場合は，方２町とすれば，南限は条里の一里の中間点，北限も別の一里の中間地点にあり，東限・西限は水路による地割がなされ，条里の南北地割と一致する可能性を有する。(1)

第９図　阿波国分寺跡の地割と周辺の条里

② 伽藍配置に関する諸問題

中心伽藍の調査が不十分なため，今後の検討の余地を有しているが，「塔ノ本」の地名などからして，南面した伽藍配置の場合は西側に塔を配した伽藍様式を示すものと思われる。

伽藍配置については再検討を要するが，回廊で囲まれた中心伽藍の外側に塔を独立させ，8世紀中葉に開始されたといわれる東大寺式の系統に属するものと思われる。(2)



第10図　阿波国分寺跡伽藍配置推定図

③　国分尼寺との関係及び歴史的背景に関する諸問題

阿波国分尼寺跡は，方 1.5 町の寺域で金堂跡・北門跡・築地跡などが検出されている。(3)

先行の文化基盤である古墳あるいは国庁跡・総社跡などとの関連や交通路などとの関係の再検討が必要である。

又，寺の造営や維持に関しては，国司や地方豪族層の経済的な協力も必要不可欠であったが，この場合に国の等級と遺構規模との関係なども究明されるべきであり，この点で，文献とのかかわりあいの問題などが生じてくる。

④　検出遺構に関する諸問題

建物の基壇の構造，礎石の形式とともに建物の配置についての比較検討が必要不可欠であり，特に主要伽藍の建物以外の建物跡の顕現や改修築などの問題が存在する。(4)

阿波国分寺跡については，寺域外かと思われる地点に建物跡が検出されており注意される。この遺構は築垣外の別院のようなものである可能性を有している。

⑤　出土遺物に関する諸問題

瓦・土師器・須恵器・陶磁器・土製品などが出土しており，阿波国分尼寺跡などとの比較検討が必要不可欠である。

出土瓦の諸様相

阿波国分寺跡の瓦類としては，軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・熨斗瓦・鬼瓦をはじめ，隅切瓦・文字瓦などが存在している。

軒丸瓦としては，重圏文軒丸瓦－数種類，複弁蓮華文軒丸瓦－八葉複弁蓮華文（パルメット文縁），八葉複弁蓮華文（鋸歯文縁），変形複弁蓮華文・四葉複弁蓮華文（調査では未検出）など，単弁蓮華文軒丸瓦－十四葉単弁蓮華文・十葉単弁蓮華文（弁間珠粒）・八葉単弁蓮華文（弁間珠粒）・八葉単弁蓮華文・十二葉単弁蓮華文・五葉単弁蓮華文・四葉単弁蓮華文などが存在している。

重圏文軒丸瓦は平城宮跡の 6012Ａ系統と思われるものが認められ，変形複弁蓮華文軒丸瓦は名西郡石井町の始覚寺跡出土のものと同笵と思われる。なお，その他の複弁蓮華文・単弁蓮華文軒丸瓦の大部分は石井町の阿波国分尼寺跡・石井廃寺・下浦廃寺などの出土瓦と同笵あるいは同系統に属しているようである。(5)

軒平瓦としては，重郭文軒平瓦－数種類，変形重郭文軒平瓦，均整唐草文軒平瓦－数種類，宝相華唐草文軒平瓦，偏行唐草文軒平瓦－数種類などが存在している。

重郭文軒平瓦は，平城宮跡の6574Ａ系統・6575Ｂ系統と思われるものがあり，阿波国分尼寺跡・始覚寺跡などの出土のものと同系統あるいは同笵と思われる。

変形重郭文軒平瓦は，平安京出土瓦（『平安京古瓦図録』中の 558 ）と同笵と思われる。(6)

均整唐草文軒平瓦の出土点数は少なかったが，上外区に珠文，下外区に鋸歯文を配したものは，入田町内ノ御田の入田瓦窯跡（県指定史跡）の昭和43年の調査で出土した軒平瓦と同系統に属しており，阿波国分尼寺跡・常楽寺跡・石井廃寺など出土のものと同系統と思われる。

偏行唐草文軒平瓦は瓦窯跡より出土したもので，平安時代中期以降の所産と考えられ，補修瓦とし

使用されたものと思われるが，他の調査区では未検出であり，今後の検討余地を有している。

丸瓦には行基葺式と玉縁付のものが存在し，文字瓦が3点出土している。いずれも丸瓦の凸面に，守を二重に囲んだ陽銘を押捺したものであり，1点は2個所に押捺されている。

平瓦は大部分が凸面に縄叩目文を有するものであり，その他のものはほとんど認められなかった。

鬼瓦としては，鬼面文鬼瓦と重弧文鬼瓦などが存在している。重弧文鬼瓦は2種類検出されており阿波国分尼寺跡・石井廃寺・始覚寺跡などより出土したものと同系統に属するものと思われる。

出土瓦の製作年代については，奈良時代後期～平安時代末頃までが比定されるが，十二葉単弁蓮華文軒丸瓦や宝相華唐草文軒平瓦のごとく，出土点数が1点のみのものも存在しており，今後の検討が必要不可欠である。

瓦の供給地としての瓦窯跡については，阿波国分寺の場合は西方の入田瓦窯跡，南方の瓦谷瓦窯跡などとの関連が考えられる。阿波国分寺跡においても，前述のごとく平窯形式の瓦窯跡が検出されている。

なお，軒丸瓦と軒平瓦のセット関係については不明確であるが，

① 重圏文軒丸瓦，複弁蓮華文軒丸瓦第1類・第2類と重郭文軒平瓦第1類

② 複弁蓮華文軒丸瓦第3類と均整唐草文軒平瓦第1類

③ 複弁蓮華文軒丸瓦第5類と重郭文軒平瓦第2類

④ 複弁蓮華文軒丸瓦第6類と偏行唐草文軒平瓦第1類・第2類

⑤ 単弁蓮華文軒丸瓦第8類と宝相華唐草文軒平瓦

などのセット関係が推定される。

今回の発掘調査及び採集品として検出されていないが，阿波国分尼寺跡出土の軒丸瓦・軒平瓦と同種のものが発見される可能性があり，今後の検討の余地を残している。

出土点数はあまり多くないが，前述のごとく，調査区のほぼ全域から須恵器・土師器などが検出されており，その他に若干の陶磁器片及び土製馬などが発見されている。

須恵器は大部分がロクロ整形あるいは糸切り技法などによって整形されたもので，坏・蓋などの器種が存在する。

土師器は小破片が多く，全形を知るものは少ないが，器形としては，坏・皿などが認められる。

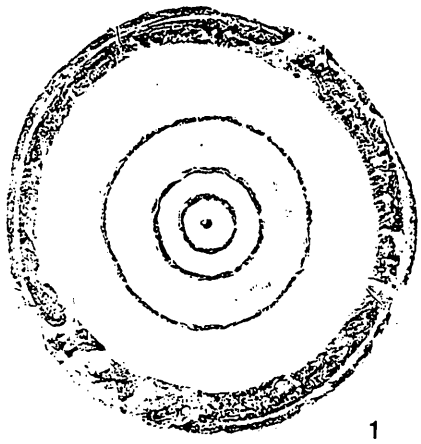
陶磁器としては，青磁・白磁片などの磁器類と常滑系を中心とした陶器類が存在する。

土製馬は土師質のもので，尻繋を突帯状の粘土紐で表現し，鋸歯文を配した鞍を有している。頭部及び脚部を欠損しているため，詳細は不明である。

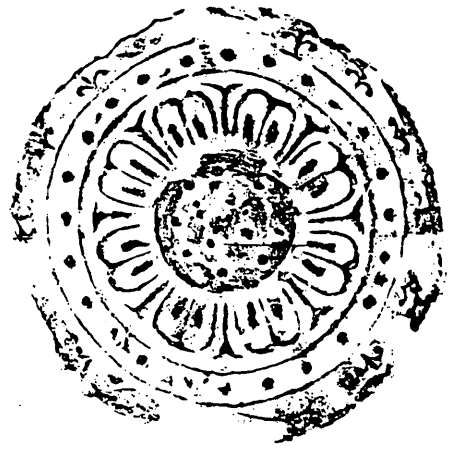
⑥ 創建年代及び廃絶年代に関する諸問題

出土瓦・土器・陶磁器などの出土遺物より，阿波国分寺は奈良時代後期～室町時代頃まで営造されたものと思われる。

その他にも未解決の問題もあり，今後の研究課題としたい。



1

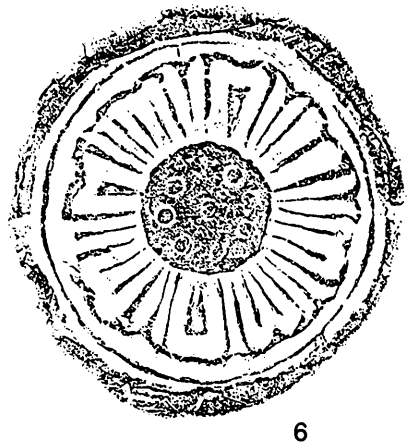


2

3

4

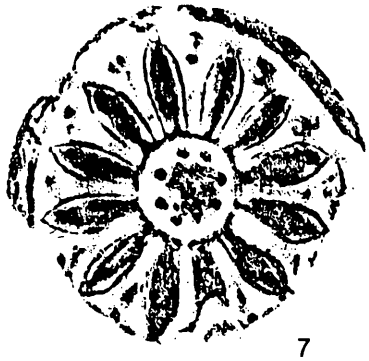
5



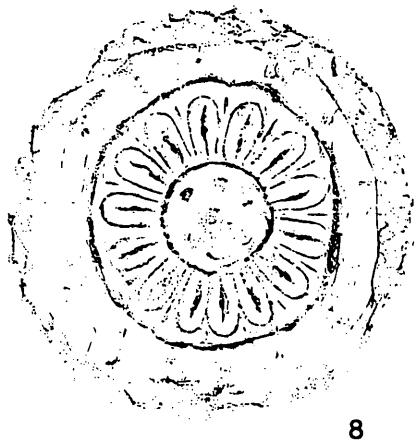
6

第11図　出土軒丸瓦拓影図 (1)　　（縮尺 1/3 ）

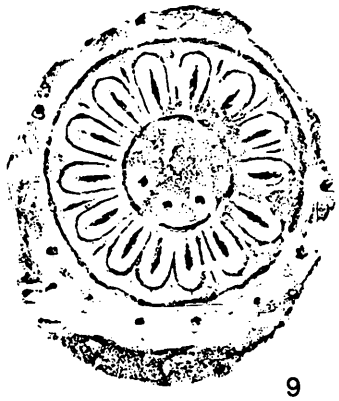
1　重圏文軒丸瓦　　2　複弁蓮華文軒丸瓦第 1 類　　3　複弁蓮華文軒丸瓦第 2 類
4　複弁蓮華文軒丸瓦第 3 類　　5　複弁蓮華文軒丸瓦第 4 類　　6　複弁蓮華文軒丸瓦第 5 類



7

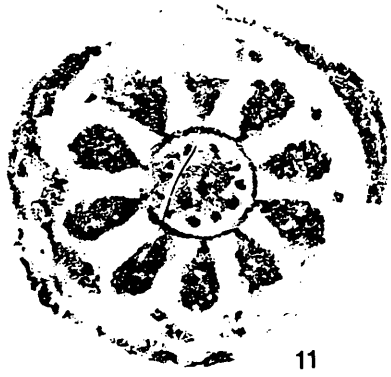


8

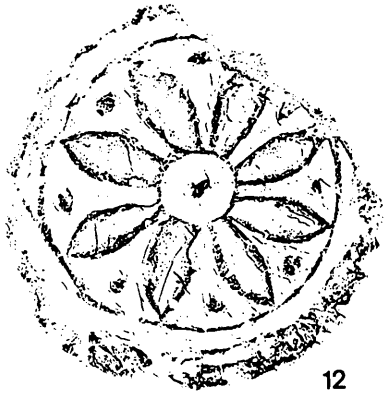


9

10



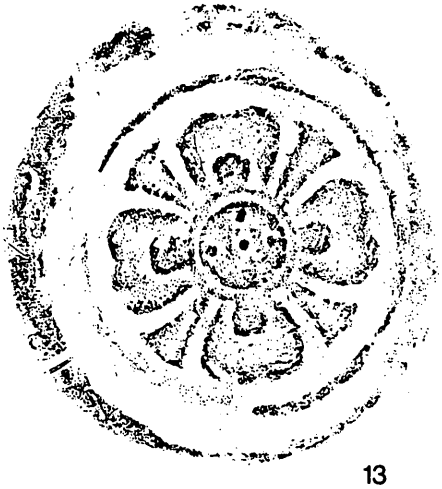
11



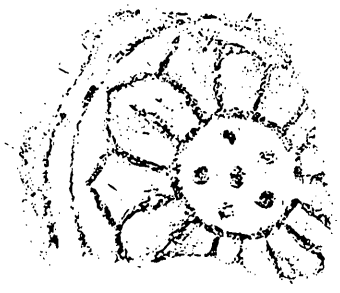
12

第12図　出土軒丸瓦拓影図 (2)　　（縮尺 1/3）

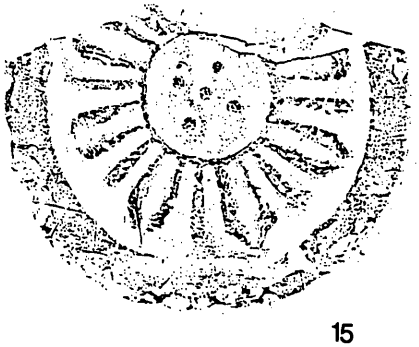
7　単弁蓮華文軒丸瓦第1類　　8　単弁蓮華文軒丸瓦第2類　　9　単弁蓮華文軒丸瓦第2類
10　単弁蓮華文軒丸瓦第3類　　11　単弁蓮華文軒丸瓦第4類　　12　単弁蓮華文軒丸瓦第5類



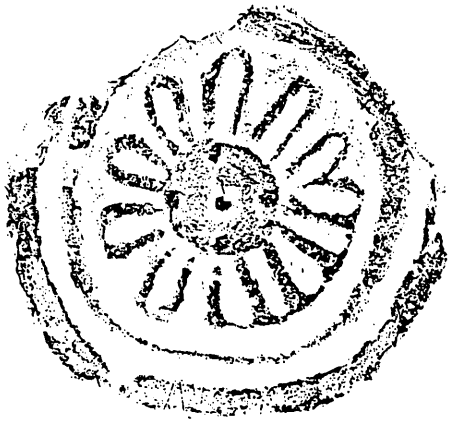
13



14



15



16

第13図　出土軒丸瓦拓影図 (3)　　（縮尺 1/3）

13　単弁蓮華文軒丸瓦第７類
14　単弁蓮華文軒丸瓦第８類
15　単弁蓮華文軒丸瓦第９類
16　単弁蓮華文軒丸瓦第10類

第14図　出土軒平瓦拓影図　（縮尺 1/3 ）

1	重郭文軒平瓦第１類	2	重郭文軒平瓦第２類	3	重郭文軒平瓦
4	重郭文軒平瓦第３類	5	均整唐草文軒平瓦第１類	6	均整唐草文軒平瓦第２類
7	均整唐草文軒平瓦第３類	8	均整唐草文軒平瓦第４類	9	均整唐草文軒平瓦第５類
10	宝相華唐草文軒平瓦	11	偏行唐草文軒平瓦第１類	12	偏行唐草文軒平瓦第２類

註

(1) 福井好行「阿波に於ける条里の遺址」『徳島大学学芸紀要』7　1958. 3
福井好行「阿波の条里」『徳島大学学芸紀要』8　1959. 3
福井好行「阿波の国府と其付近の条里」『徳島大学学芸紀要』9　1960. 3
福井好行「阿波の条里　補遺」『徳島大学学芸紀要』11　1962. 3
落合重信『条里制』　1967. 11
渡辺久雄『条里制の研究』　1968. 6

(2) 斎藤　忠「国分僧寺・尼寺跡の研究の課題」『日本歴史』第288号　1972. 5
八賀　晋「国分寺建立における諸様相」『日本古代の社会と経済』下巻　1978. 3

(3) 徳島県教育委員会・石井町教育委員会『阿波国分尼寺跡緊急発掘調査概報』　1971. 3
徳島県教育委員会・石井町教育委員会『阿波国分尼寺跡遺跡（第2次）緊急発掘調査概報』
1972. 3

(4) 註(2)と同じ

(5) 浪花勇次郎『阿波国古瓦拓本集』　1973. 3
徳島県博物館『阿波の古代寺院』　1974. 3

(6) 平安博物館編『平安京古瓦図録』解説編　1977. 3

参 考 文 献 （阿波国分僧寺跡・阿波国分尼寺跡関係の主要なもの）

(1) 「名東郡　国分寺址」『徳島県史蹟名勝天然記念物調査報告』第一輯　1929. 3

(2) 「名西郡　国分尼寺址」『徳島県史蹟名勝天然記念物調査報告』第一輯　1929. 3

(3) 田所市太「阿波国分寺」『国分寺の研究』下　1938. 7

(4) 沖野舜二「国分寺附国分尼寺」『徳島教育』第47号　1951. 10

(5) 堀井三友「阿波国分寺址」『国分寺址之研究』　1956. 11

(6) 堀井三友「阿波国分尼寺址」『国分寺址之研究』　1956. 11

(7) 阿部一石「阿波国分尼寺の遺跡について（阿波の太古　其七）」『阿波郷土会報』23　1959. 12

(8) 飯田義資『粟の抜穂』巻一　1961. 3

(9) 「阿波古瓦」研究グループ（三好昭一郎）「阿波国分寺の瓦について」〔阿波古瓦の研究(3)〕『徳島教育』第164号　1961. 7

(10) 「阿波古瓦」研究グループ（三好昭一郎）「経瓦と四葉蓮華文鐙瓦」〔阿波古瓦の研究(9)〕『徳島教育』第171号　1962. 2

(11) 羊我山人「阿波の廃寺」『徳島教育』第174号　1962. 5

(12) 徳島県史編さん委員会編（秋山　泰）「奈良仏教と阿波」『徳島県史』第一巻　1964. 3

(13) 藤目正雄「国分寺学術総合調査について」『ふるさと阿波』41　1964. 8

(14) 阿部一石「阿波の国分寺考」『ふるさと阿波』43　1965. 2

(15) 大木元ミノリ「阿波国分尼寺址の研究」『国府町郷土資料　第三集　国分寺研究』　1965. 9

(16) 藤目正雄「禅刹国分寺」『国府町郷土資料　第三集　国分寺研究』　1965. 9

(17) 三好昭一郎「阿波の古代廃寺について」『四国考古学古代史研究』1　1968. 3

(18) 湯浅良幸（七条文堂拓）『阿波国瓦譜』　1971. 1

(19) 徳島県教育委員会・石井町教育委員会『阿波国分尼寺跡緊急発掘調査概報』　1971. 3

(20) 徳島県教育委員会・石井町教育委員会『阿波国分尼寺遺跡（第2次）緊急発掘調査概報』　1971. 3

(21) 福井好行「国分寺」『徳島県の歴史』　1973. 1

(22) 浪花勇次郎『阿波国古瓦拓本集』　1973. 3

(23) 徳島市文化財保護委員会編（沖野舜二）「県指定　阿波国分寺跡」『徳島市の文化財』　1973. 3

(24) 徳島市史編さん室編（三好昭一郎）「国府と国分寺」『徳島市史』第一巻　総説編　1973. 10

(25) 徳島県高等学校教育研究会地歴学会編「阿波国分寺」『徳島県郷土事典』　1974. 1

(26) 徳島県高等学校教育研究会地歴学会編「阿波国分尼寺」『徳島県郷土事典』　1974. 1

(27) 徳島県博物館『阿波の古代寺院』　1974. 3

(28) 三好昭一郎「国分寺と国分尼寺」『阿波の歴史』　1975. 5

(29) 田辺征夫「阿波国分尼寺」『仏教芸術』第103号　1975. 9

(30) 白木康夫「国分寺・国分尼寺の伽藍配置について（下）」『考古学ジャーナル』№116　1975. 12
(31) 徳島県教育委員会「阿波国分寺跡緊急発掘調査概報－徳島市道改築工事に伴う緊急発掘調査」『徳島県文化財調査概報　1976年度』　1978. 3
(32) 徳島県教育委員会編「阿波国分尼寺跡」『徳島県の文化財』　1978. 3
(33) 徳島県教育委員会編「阿波国分寺跡」『徳島県の文化財』　1978. 3
(34) 一山　典「南海道における国分二寺について」『しぶき』№65　1978. 10
(35) 徳島市教育委員会『阿波国分寺跡第1次調査中間報告－現地説明会資料－』　1978. 12
(36) 徳島市教育委員会「阿波国分寺（第1次）」『徳島市文化財だより』№2　1979. 3
(37) 徳島市教育委員会『阿波国分寺跡第1次調査概報－1978年度－』『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第4集　1979. 3
(38) 一山　典「阿波国分寺跡第一次調査概要」『徳島市史だより』第5号　1979. 3
(39) 徳島市教育委員会『阿波国分寺跡第2次調査中間報告－現地説明会資料－』　1980. 3
(40) 徳島市教育委員会『阿波国分寺跡第2次調査概要』『徳島市文化財だより』№4　1980. 3
(41) 徳島市教育委員会『阿波国分寺跡第2次調査概報－1979年度－』『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第7集　1980. 3
(42) 一山　典「阿波国分寺跡第二次調査概要」『徳島市史だより』第6号　1980. 3
(43) 徳島市教育委員会「阿波国分寺跡」『徳島市の原始・古代－埋蔵文化財資料展－』　1980. 11
(44) 天羽利夫「阿波国分尼寺址」『徳島県百科事典』　1981. 1
(45) 一山　典「阿波国分寺址」『徳島県百科事典』　1981. 1
(46) 徳島市教育委員会『阿波国分寺跡第3次調査中間報告－現地説明会資料－』　1981. 3
(47) 徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第3次調査概要」『徳島市文化財だより』№6　1981. 3
(48) 一山　典「阿波国分寺跡第三次調査概要」『徳島市史だより』第7号　1981. 3

図　　版

D地区 調査地点遠景　　北西より

D地区 瓦　　列　　南より

D地区　建物跡

西より

D地区　溝状遺溝

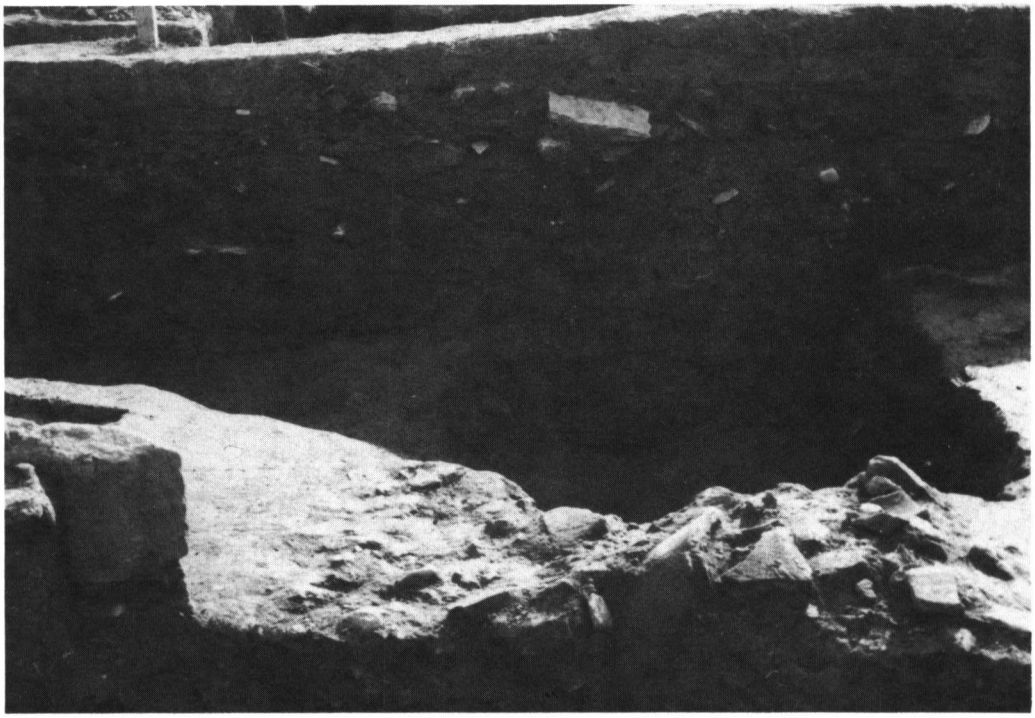
南より

図版2

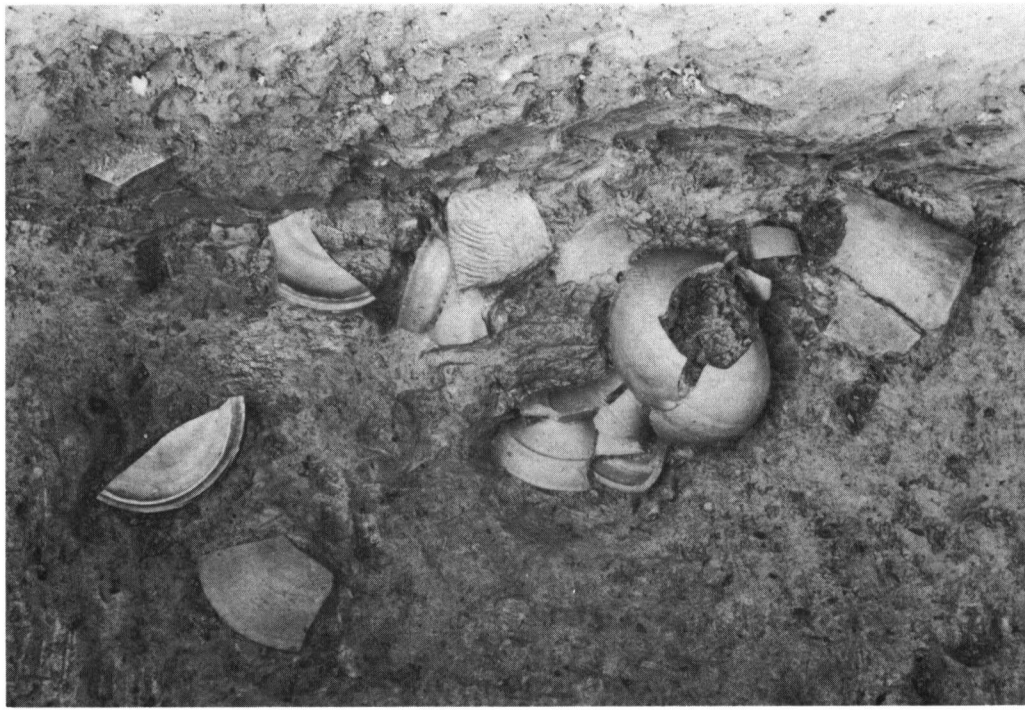
D地区 溝状遺構　　南より

D地区 溝状遺構（古墳時代）　　南より

D地区　溝状遺構断面　　北より



D地区　溝状遺構断面　　北より



D地区　溝状遺構須恵器出土状態

D地区　土器出土状態

F地区　瓦集積遺構

東より

F地区　溝状遺構

東より

F地区　溝状遺構断面　　東より

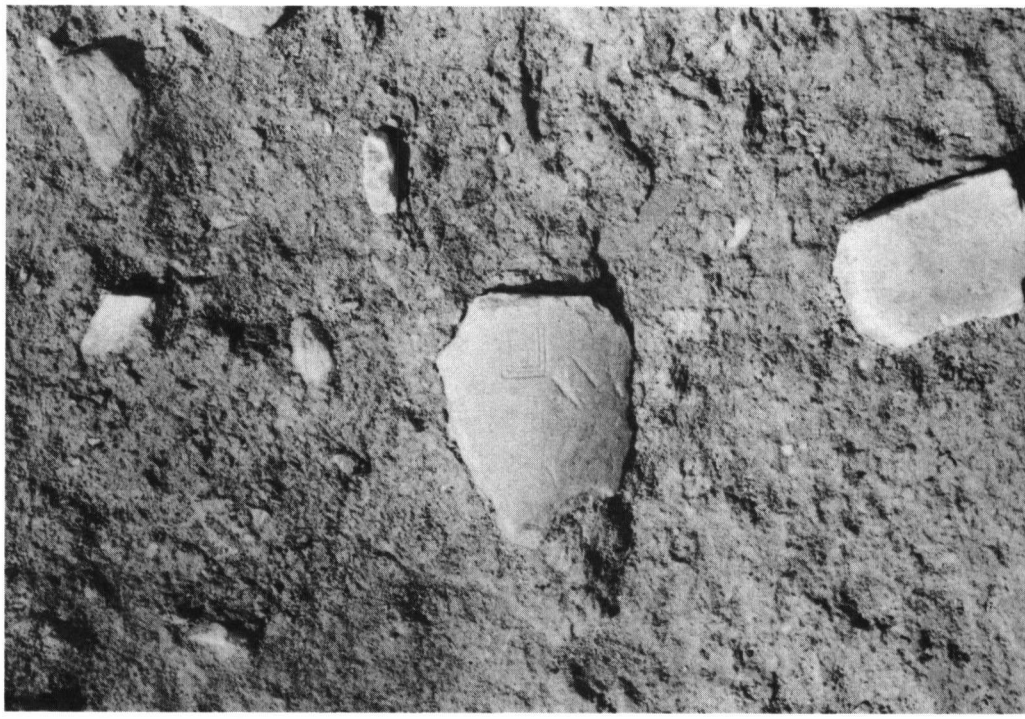
F地区　溝状遺構断面　　南東より

F地区　ピット状遺構

北より

F地区　ピット状遺構

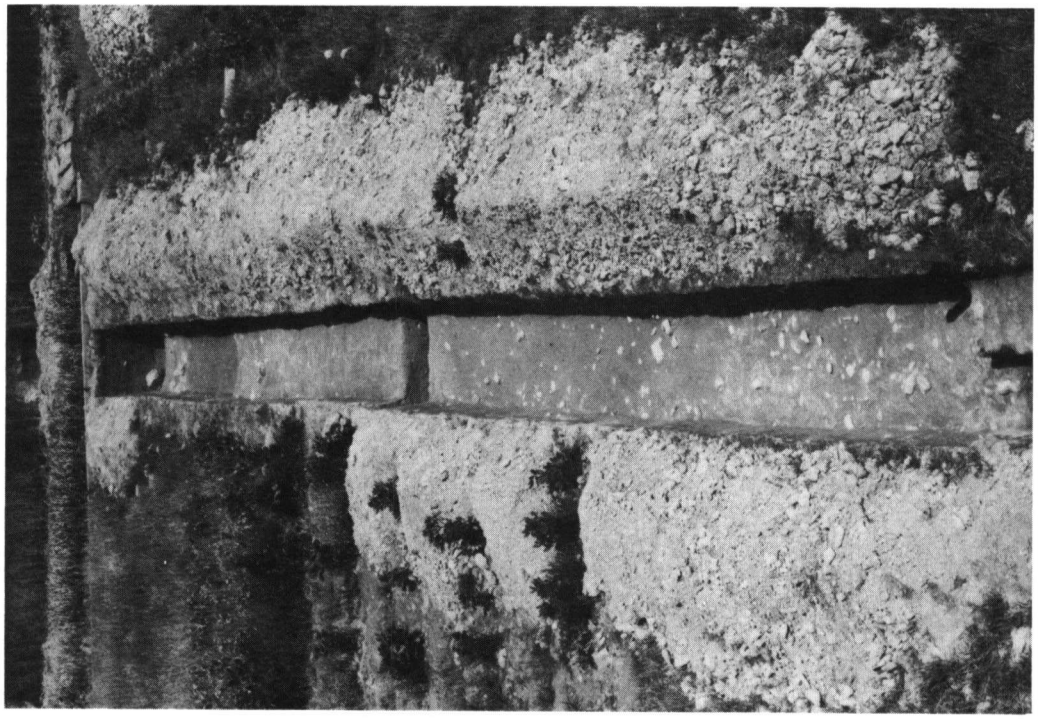
北より



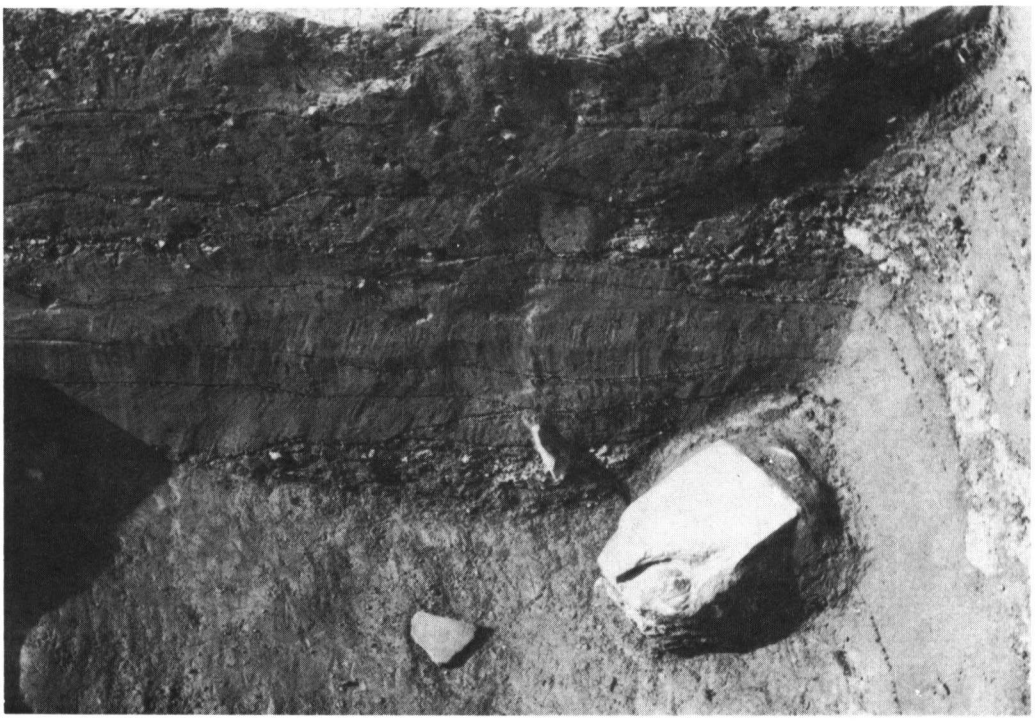
F地区　文字瓦出土状態

F地区　土器出土状態

G地区　調査地点遠景　　北東より



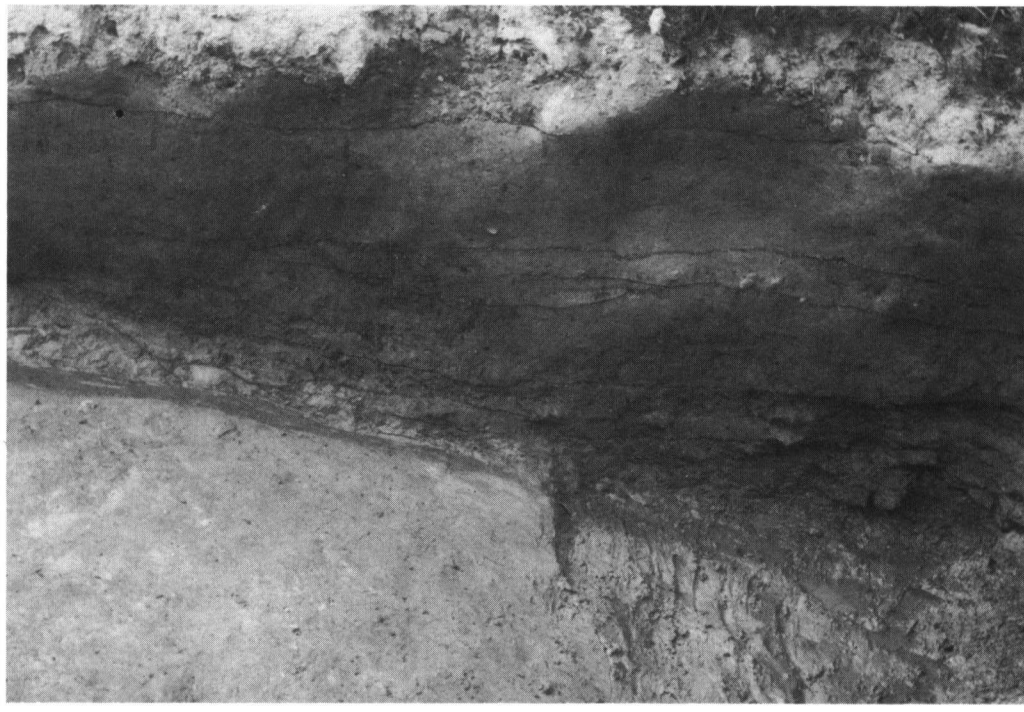
G地区遠景　　東より



G地区　溝状遺構断面　　南より

G地区　溝状遺構断面　　北より

H地区 溝状遺構　　東より

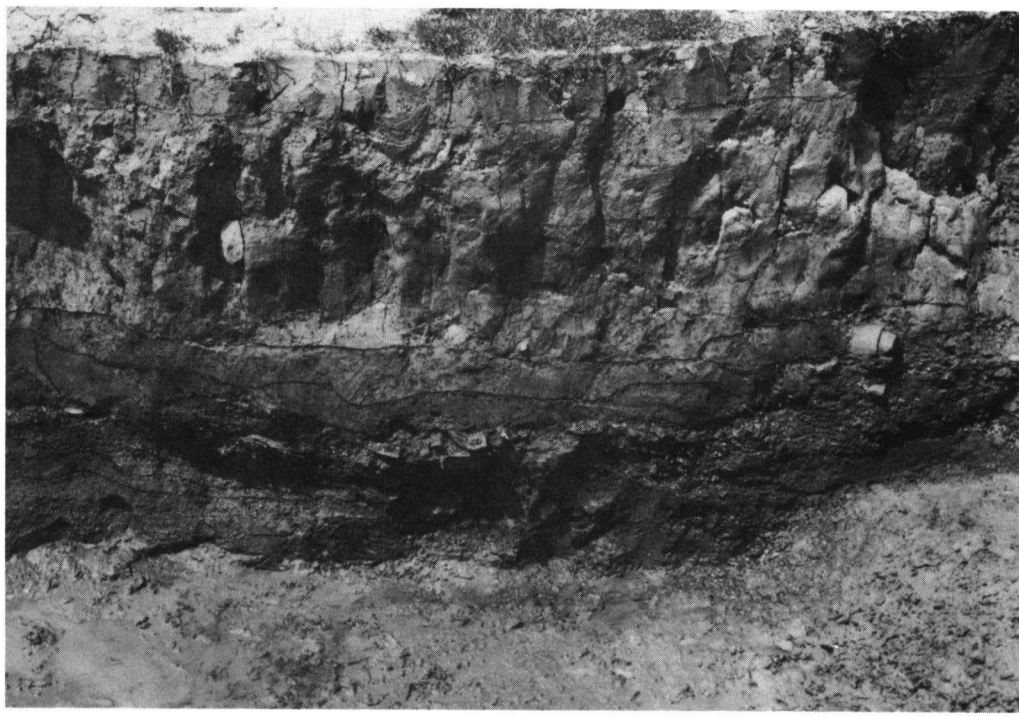


H地区 溝状遺構断面　　南より

H地区　瓦出土状態　　北より

H地区　軒丸瓦出土状態　　北より

Ⅰ地区　調査地点遠景　　南東より



Ⅰ地区　溝状遺構断面　　南より

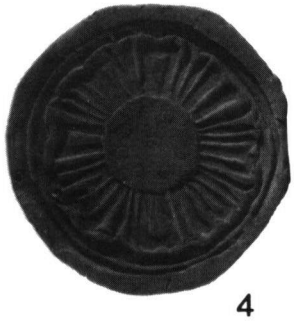
Ⅰ地区　溝状遺構断面　　南より

Ⅰ地区　瓦出土状態　　北より

1

2

3


4

5

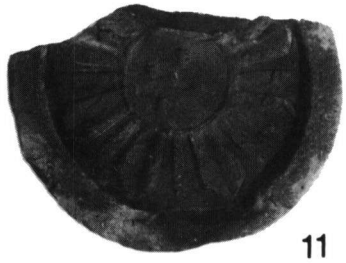
6

7

8

9

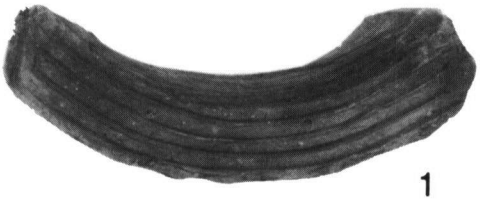
10

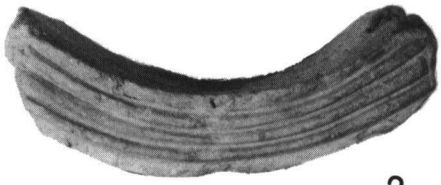

11

12

出土軒丸瓦　　（縮尺不同）

1	重圏文軒丸瓦	2	複弁蓮華文軒丸瓦第1類	3	複弁蓮華文軒丸瓦第3類
4	複弁蓮華文軒丸瓦第5類	5	単弁蓮華文軒丸瓦第2類	6	単弁蓮華文軒丸瓦第2類
7	単弁蓮華文軒丸瓦第4類	8	単弁蓮華文軒丸瓦第5類	9	単弁蓮華文軒丸瓦第6類
10	単弁蓮華文軒丸瓦第8類	11	単弁蓮華文軒丸瓦第9類	12	単弁蓮華文軒丸瓦第10類


1


2

3

4

5

6

7

8

9

10

11

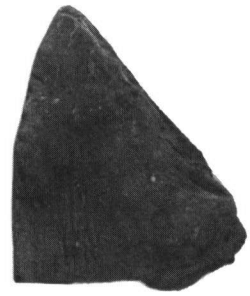
12

出土軒平瓦

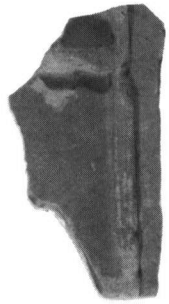
（縮尺不同）

1　重郭文軒平瓦第1類
2　重郭文軒平瓦第1類
3　重郭文軒平瓦第1類
4　重郭文軒平瓦第1類
5　重郭文軒平瓦第3類
6　均整唐草文軒平瓦第2類
7　均整唐草文軒平瓦第5類
8　宝相草唐草文軒平瓦
9　偏行唐草文軒平瓦第1類
10　偏行唐草文軒平瓦第2類
11　偏行唐草文軒平瓦第2類
12　偏行唐草文軒平瓦第2類

1

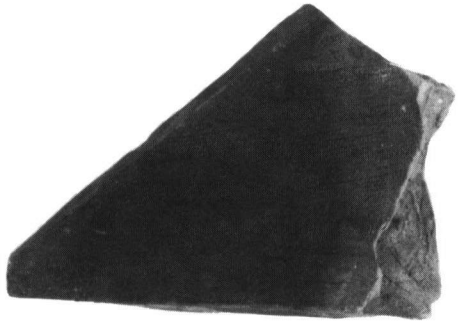

2

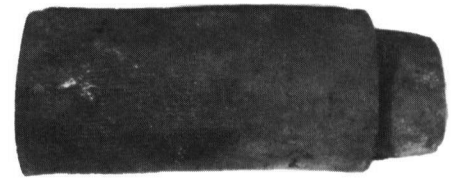
3

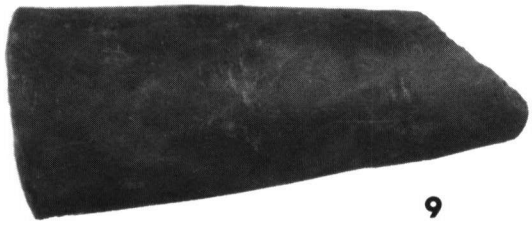

4

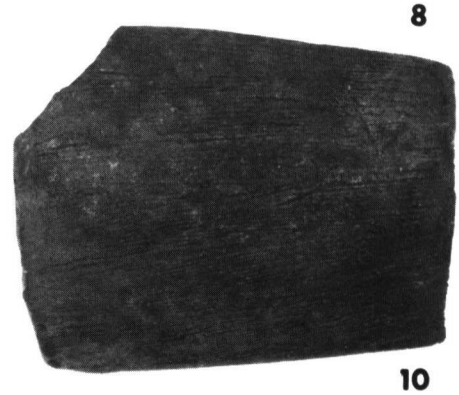
5

6


7


8


9


10

出土瓦類　（縮尺不同）

1　鬼面文鬼瓦　2　鬼面文鬼瓦　3　重弧文鬼瓦　4　重弧文鬼瓦　5　文字瓦
6　文字瓦　7　隅切瓦　6　丸瓦（玉縁付）　9　丸瓦（行基草式）　10　平瓦

徳島市埋蔵文化財調査報告書
第 9 集

阿波国分寺跡第 3 次調査概報
―― 1980 年度 ――

昭和 56 年 3 月 31 日

編 集　徳 島 市 教 育 委 員 会
発 行　徳 島 市 教 育 委 員 会
印 刷　グ ラ ン ド 印 刷